赤毛のアン？　グリーンゲーブルスのアン？
アンという名の少女！

2020年10月
眞鍋由比

この9月13日から日曜に始まったＮＨＫのドラマがすばらしい。何度も映画化されミュージカル化され、アニメ化（しかも監督は高畑勲）までされたこの作品、少女小説の古典として、うちの図書館にも副本が何十冊もある基本図書です。
正直、もうアンはいいよ、と思ってました。まぁ最初だけ見ようとチラ見したら、もう！ため息がでるような、カナダのプリンスエドワード島の美しい風景の中、マシューが駅まで男の子を迎えにいきます。けれど手違いで赤毛のそばかすだらけのやせっぽちの女の子が待っています。仕方なくその子を馬車に乗せて帰ると、とまらないおしゃべりの空想家で…。人のいいマシューは間違いだといえず、家に着いたら妹のマリラがきっぱり間違いだから送り返すと宣言。泣き崩れるアン。「何て名なの」「ペネロペとかコーデリアとかいう感じで呼んでください」「そうはいかないわ、本当の名前は？」「アンです。Ｅがつくアンと呼んでください。」
孤児院からやっと引き取ってくれる家ができたと大喜びしてた。子沢山の家に子守として引き取られても多すぎる仕事がこなせないと折檻されていた。同い年くらいの子が集まる孤児院でも変わった子だといじめられていた。
今までアンはただ陽気でほがらかな孤児院育ちとしか描かれていませんでした。でもただおしゃべりだったのではなく、空想しておしゃべりして自分を鼓舞しなければ生きていけないほど過酷な生活を送っていたという描写。
マリラはアンが戻される、と子沢山の家族を前に表情を失ったとき、たまらなくなって「今回は間違いだとわかったからいい」とアンを連れて帰ってくれます。質素なキリスト教徒の生活。おせっかいで口の悪い隣のおばさん。親友となるダイアナは小難しい言葉を使いこなすアンを気に入ってくれ、新しい生活がはじまります…。
今まで何気なく読んできた『赤毛のアン』が実はいま見てもかなり深い物語だった…。ぜひ日曜日は半沢直樹のあとドラマ『アンという名の少女』見て欲しいです。

作者のモンゴメリはこのアンの物語の原稿を最初、出版社に持ち込んだとき、どこにも相手にされず、三年間引き出しの中に眠っていたそうです。でも三年後、持ち込んだら大ヒット。タイミングって難しい。そういう意味ではまだ認められなくてもこれから世の中を変えるほどの作品が眠っているのかもしれない。『ハリー・ポッター』もそうでしたし。モンゴメリが最初の原稿料で買ったのが『シェイクスピア全集』だったそうで、アンの物語にも引用や影響が随所にみられます。
『赤毛のアンに隠されたシェイクスピア』松本侑子著　集英社　2001　インターネットがまだ未発達だった頃、どうやって引用先やアレンジを探したか、苦労がわかります。赤毛のアンが住んでいる村アヴォンリーはシェイクスピアの生地ストラトフォード・アポン・エイヴォンのエイヴォンから来たのだとか。舞台となったプリンスエドワード島は本当に美しく、写真集がいくつもでています。今回のドラマにも目が覚めるような風景が目白押しです。
モンゴメリは料理上手だったので物語のなかでもおいしいものがたくさん出てきて、レシピ集も豊富です。
そしてアンに対するオマージュ作品。
『本屋さんのダイアナ』
柚木麻子著　新潮文庫　2014
アンがすごいのではなく親友のダイアナがアンを受け入れてくれたから、アンはあれほど輝けたのだ、と登場人物の一人がいいます。父の顔を知らない大穴と、優等生でだれにも一目おかれている彩子が本好ききっかけで親友になって、最強のコンビだったのに、卒業前に仲たがいしてしまいます。女の子が生きていくうえで、解かなければならない呪い。ダイアナも親友の彩子もたいへんな思いをして友情を取りもどします。現在の高３生が中２のときに課題図書だった本書。これを期にもう一度読んでみませんか？

SaenekoDさんによる写真ACからの写真